

I 教育研究推進室の活動報告

1. 大学院生支援事業

※執筆者の学年は2017年度のもの

1-1 フィールド調査プロジェクト

被爆者の新たな心境と語り——被爆者を取り巻く環境との相互作用から

愛葉由依 文学研究科人文学専攻 文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士前期課程2年

本プロジェクトの背景 人類初の実験性原爆投下から70年以上たち、被爆者の高齢化が進んでいる。一方、オバマ大統領による広島原爆ドームおよび平和記念資料館訪問、北朝鮮による核実験とミサイル開発、福島での原発事故など、被爆者を取り巻く社会情勢も変わりつつある。今、あらためて被爆者の語りに耳を傾ける必要がある。

本プロジェクトの目的 終戦から72年経った今、被爆者と他国間とその人々に対する思いが変化、多様化している状況や、被爆者がフラッシュバックなどの困難に直面しながらも新たに語ろうとしている状況に注目し、被爆者の心境や語りの変化をもたらしきつかけとなった個人的な出来事や被爆者を取り巻く環境の変化との相互作用を明らかにするなかで、被爆体験の多層性を示すことを目的とする。

研究対象 広島・長崎で被爆後、愛知県で50年以上暮らしている「被爆者健康手帳」を所持する人々を研究対象とした。なお、これらの中で、広島で被爆した人々のうち一人は筆者の祖父である。

方法 ライフヒストリー研究法を基軸とし、筆者自身のアイデンティティや、対話による心の揺れ動きを含めつつ、参与観察、行動観察、聞き取り調査を中心に行った。記述においては、対話が行われた状況や相互作用もあわせて示す。また、広島で救護活動を行い入市被爆した祖父については、ともに広島へ再訪問するなかで対話を重ね、語りの内容や心境の吐露などに関して、2年前の広島訪問時との比較検討も行った。対話については、聞き取り相手の許可を得たうえでレコーダーを使用して録音し、書き起こした上で、分析を行った。

結果 広島・長崎から距離が離れている愛知県は、被爆者にとっては被爆体験を想起すること、夢やフラッシュバックとなって蘇ることが比較的生じにくい一種の防衛空間ともなるが、その分、被爆体験にまつわる刺激に対して被爆者の感覚を鋭敏化させ得るような脆さも持ち合わせていた。また、夢自体ではなく、夢やフラッシュバックの言語化が被爆体験の克服という機能を持つ可能性も見えてきた。約2年前に広島で対話をしたときの祖父は、救護活動について語ることを避けていたが、フラッシュバック経験後の今回の広島での対話からは、忘れかけている救護活動中の記憶を蘇らせたいという思いが強まっていることが明らかになった。

先行研究で挙げられているような被爆者が持つ、罪意識を根底とする意識は、反米を除いて、70年以上経っても根底に残っていることがわかったが、それらは、従来報告されてきたような「死」の方向よりは、「生」の方向に向けられつつあることも明らかになった。また、原爆を投下した米国に対する怒りや反感よりも、原爆、そして核兵器そのものに対する遺憾の念のほうが強くなりつつある。さらに、70年以上という時の経過もあり、受動的で他者に依存する意識よりも、能動的で自律的に「生」に向き合おうとする意識の方が強くなりつつあることが明らかになった。近年の核実験や原発事故にともなう放射線の問題、オバマ大統領の広島訪問によって被爆者が再び国際的に注目される今、被爆者は体験者と非体験者、加害者と被害者とい

う梓をこえて、核廃絶や平和に向かって連帯しようとする意識を持ちはじめていると言える。

筆者が持つ被爆「三世」という立場には被爆体験者との共感を生み出す作用があり、祖父との関係では孫という立場が強く作用し、家族内でしか語り得ない内容が引き出されることも確認された。また、筆者の「被爆体験に関心を持つ20代の若者」というアイデンティティは、インフォーマントと筆者の間でパワーやエネルギーを相互に与え合うという作用があり、筆者との共同構築的な対話は、被爆者たちの被爆体験の再構築に貢献する側面も認められる。しかも、共同構築的な対話は、自分ひとりでは語ることができなかった内容を言語化することにより、それらを自身の意識の中で昇華していく作用も期待できることが明らかとなった。